

---

# 南北の海峡 -The Split Fate-

伊東 椋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南北の海峡 - The Split Fate -

### 【Nコード】

N6322Z

### 【作者名】

伊東 椋

### 【あらすじ】

41度線 本州と北海道を隔てる津軽海峡に定められた、南日本と北日本を隔てる軍事境界線。南北を隔てる海峡の代名詞。大戦後、南北に分断された日本は半世紀の間、二つの国家として対立していた。北日本軍の八雲浩上尉は負の過去を抱えながら、ある任務へと向かう。その先に、彼の過去に深く関わる運命が待っていると知らず

## 01 MDL (前書き)

MDL Military demarcation line  
e .

: 軍事境界線。

(注) この物語は、実在する国家、団体、事件等とは一切関係ありません。又、個人の主義、主張を表すものでもありません。

## 41度線

それは、南北に分断した日本の中に定められた軍事境界線である。北海道と本州を隔てる津軽海峡の中心線に設定され、北海道戦争（北側の名称：祖国解放戦争）の休戦協定の際に、北海道を領土とする北日本と本州以南を領土とする南日本の軍事境界線として宣言された。

北緯41度線付近にあることから、41度線と呼ばれることが多く、又は北方軍事境界線と呼称されることもある。

元々は大戦末期、米国と講和を成した日本に対し、ソ連が不可侵条約を破棄して侵攻し、北海道の半分を占領したのが始まりだった。ソ連は北海道の半分を占領下に置いたまま、留萌〜釧路までのラインを設定し、日本人民共和国を建国させた。このソ連の思惑により、日本は南北に分断された。

この日本の分断により北海道戦争へと至るが、結果的に北海道全土が北日本の支配下に落ち着き、日本は津軽海峡を境に分断国家へと至った。

境界線付近約三海里は非武装中立海域とされており、休戦協定の内の規定によって双方の警備部隊が境界線付近の監視と警備を実施している。

海峡は一見穏やかに見える時もあるが、どこか常に怪しい波のうねりがあった。

海面を撫でるように、一陣の風が吹く。

北方の風が吹く、冷たい津軽海峡。

北海道と本州を隔てる海峡　それは、政治的にも深く双方を隔てる海峡でもあった。

その海峡は半世紀の間、冷たい風が吹き続けている

冷たい風を薙ぐように、一機のヘリが飛行していた。そのヘリのすぐそばには、見えない境界線が引かれている。

本州側　南日本側の海上には、境界線付近を飛行するヘリをじっと見据えるように、一隻の巡視船が境界線の横に並行して航行していた。

南日本　海上保安隊の巡視船が、境界線ギリギリを飛行する相手のヘリに警戒心を抱きながら白波を立てていた。

すぐそばに引かれた見えない境界線の上空には、北日本側のヘリがこちらからの警告にも関わらず近距離まで接近してきた。

近年続発している北日本側の船舶による領海侵犯。その例は漁船や調査船が多い。南日本側はその度、再三警備に当たってきたが、向こう側の態度は日々エスカレートしていった。北日本側は態度を硬化させ、遂にはヘリ搭載の漁業監視船まで派遣される始末だった。北方軍事境界線、通称41度線は休戦協定の際に宣言されたものだが、北日本側の船舶等による侵犯が増加する傾向にあった。船で海峡を渡って脱北するケースを受け境界線付近の警備は南日本側より嚴重のはずなのだが、それは自国民を逃がさないためだけであり、脱北以外の侵犯は黙認しているようだった。

「こちらは日本帝国海上保安隊である。貴機の行動は明らかな協定違反である。境界線付近での行動を直ちに中止し、退去せよ」警告を呼び掛けるが、相手は応じる気配を見せない。ヘリは境界線ギリギリでの飛行を続け、母船は離れた場所で見守っている。

前までは漁船や調査船が多かったが、最近になってはヘリ搭載の

漁業監視船が出没するケースも目立つようになった。

その船もまた、退役した軍艦を改造したと思われる装備を施していた。船首には30ミリ程度の機関砲などが見え、それなりの武装を積んでいるのが確認できた。

対して海上保安隊の巡視船は軽武装。元々軍艦のような戦闘艦ではなく、あくまで治安上の装備しか許されていない船舶である。外装も一般商船等と大して変わり様がない。退役した軍艦と思われる相手の船と比較すれば、その差は歴然だった。

境界線付近での軍の活動は、両国の平和と安定を脅かす。国内の政治家たちはその言葉を信じ、軍による直接警備によって生じる摩擦に配慮する方針を取った。そのために、日本の沿岸警備隊と呼ばれる海上保安隊が境界線付近の直接警備を一任している。そのすぐ背後には大湊の帝国海軍が身を待機させているが、最初に接触を受ける役を抱える前面には海上保安隊が常に立っていた。

「なにかあつたら、我々では太刀打ちできないな」  
双眼鏡から見える相手の監視船の武装を見て、初老の船長は溜息を吐いた。

「更に、あのヘリも武装なんかしたらたまつたものじゃないです」  
自分たちを挑発するように境界線ギリギリを飛び回っているのは、武装用の攻撃型も存在するZ-9ヘリコプターだった。最近出没するようになった漁業監視船に搭載されているヘリコプターであり、この機による領空侵犯も増えている状況だった。

「……ッ、言っているそばから」  
Z-9ヘリコプターは突然ぐん、と機体を左に傾けると、そのまま一気に高度を下げながら境界線を突破した。巡視船は領空侵犯に対する警告を発する。しかし彼らは更に驚いた。

「な…ッ!？」  
「近いッ!」

相手はこちら側に入ってきただけに飽き足らず、そのまま船の目と鼻の先まで接近してきたのだ。自分たちの目の前に急接近したZ

- 9ヘリコプターは、避けるように左舷側へと通り過ぎてしまった。あつという間の出来事だったが、明らかな危険を伴う挑発行為に、巡視船の乗員たちは声も出なかった。

相手の空に侵入するだけでなく、更に相手の巡視船へ接近するな  
ど聞いたことがない。もしかしても武力衝突の要因にも成り得た。  
しかし彼らは躊躇なくやり遂げた。巡視船への急接近をやつてのけ  
たZ-9ヘリコプターは旋回すると、まるで嘲笑うかのように再び  
巡視船の目の前を通り過ぎ、一部始終を見ていた母船の方へと帰っ  
ていった。

## 01 MDL（後書き）

### 解説

#### 41度線

南日本と北日本の間定められた軍事境界線。北方軍事境界線とも呼ばれ、北緯41度線付近にあることから41度線と呼ばれることが多い。北海道戦争以前は、北日本はソ連が占領した北海道の半分を実効支配していた状態だったために留萌〜釧路を線に結び、42度線

を定めていたが、北海道戦争（祖国解放戦争）の結果、北海道全土を掌握した北日本との事情を踏まえ、津軽海峡の中心線に新たな軍事境界線として設定された。休戦協定により境界線付近三海里を非武装中立海域として宣言されたが、近年、悪化する政治的事情から北日本側からの領海侵犯などが増えている傾向にある。

#### 北日本

正式名称、日本人民共和国。

ソ連の配下、北海道道北にて建国された社会主義国。日本共産党の一党独裁体制。北海道全土を掌握後、首都を札幌に定める。政治総省による厳しい監視体制の下、全国民を抑制している。独裁体制による圧政により、南日本への脱北を計る北日本人が出没するケースが増えており、脱北に対する取締を厳しく張っている。人民赤軍・人民海軍・人民空軍・人民国防軍の四つの系統を持つ人民軍を保有。世界唯一の被爆国（南北の海峡 零部参照）でありながら原子力潜水艦などの核を用いた兵器も保有しているが、原爆などの核兵器開発は確認されていない。経済や軍事は先進国としては充分だが、国民に対する監視体制など自由に対する弾圧は非常に厳しい。



南日本

正式名称、日本帝国。

連合国と対等な立場で講和したため、史実と異なり大日本帝国の形態をほとんど受け継いでいる。君主制国家。

講和後、連合国の政治的介入によって憲法の改正や民主主義化が進んだ（その点に関して、対等な立場で講和したと言う見方が疑問視されることになる）

首都は東京。北海道戦争における軍需景気と高度経済成長により現在は米国に次ぐ経済大国となっている。北海道戦争後、陸海軍に空軍を加え、現在は陸海軍省が統合化した防衛省の下で陸海空の軍隊を保有している。米国とは安全保障上の同盟関係にある。現政権は北日本への以前までの強硬路線からの転換を主張、実施している。

#### 海上保安隊

北海道戦争後に創設された日本版沿岸警備隊。南日本周辺の海上の安全と治安の確保を図ることを任務としている。国土交通省の外局ではあるが、北日本との摩擦を配慮して、北日本との関係が一際悪化した1994年頃から海軍から軍事境界線付近での直接警備を担当するようになる。あくまで海上警察的な組織だが、境界線付近では常に軍事的緊張に立ち合う役を買わされている。

Z - 9

北日本側の漁業監視船に搭載されていたヘリコプター。人民軍も保有している。海上保安隊の巡視船に急接近すると言う挑発行為を見せた。

以前投稿させて頂いた作品は、この作品の前振りのようなものかもしれません。元々本作を主体に案を練っていたのですが、先に9月

に投稿した作品は簡単に書き下ろしてみたものです。  
本作は、前作と異なり時代は現代。日本が南北に分断してから、半  
世紀が経った頃の物語です。  
また劣らぬ部分が目立つことになるかと思いますが、暖かい目で見  
てくだされば幸いです。

## 02 塩辛い過去

狭い空間に、何も見えないほどの暗闇。

そこに反響する悲鳴。

自分がどこの世界にいるのかわからなくなってしまつような切迫した状況が、自分を揉みくちやに塗り固めようとしていた。

悲鳴と交差するように、響き渡る甲高い銃声と、外板を叩くようなエンジン音。

十名分の悲鳴と恐怖を満載にした小さな漁船は、荒れ狂う嵐に翻弄されたかのような状況に陥っていた。

恐怖に身を固められる俺の手を、馴染み深い暖かな感触がぎゅつと包み込む。それが闇に引きずり込まれようとしている俺を唯一繋ぎ止めている存在だった。

恐怖のあまりに周囲と相反して声が出ない弟を安心させるかのように、夏苗姉さんの優しいげな声がかけられる。

「大丈夫、大丈夫だよ。お姉ちゃんがついてるから」

そう言ってくれる夏苗姉さんの声も、若干震えているように聞こえた。周りの大人たちが子供のように泣き叫んでいる中で、本当の子供である俺や夏苗姉さんの方が声をあげていないというのは、何だか不思議な光景である。

「かな……、ねえ……ちや……」

渴き切った声は、まともに言葉を紡がせなかった。心の中では夏苗姉さんを叫ぶように呼んでいるのに、口は全然声を出してくれなかった。

周囲を激しく渦巻いていた波が、突然、流れを変え、俺たち姉弟を巻き込むように濁流として襲いかかってくる。その濁流から義父と義母が庇うように守ろうとするが、その濁流は義父と義母さえ巻き込み、俺たちは家族もろとも外へ流された。

今まで暗闇に染まっていた視界が、久しい光の侵入に覆われる。同時に新鮮な空気が肺におくられ、それをじつくりと味わう暇もなく体を甲板に投げ出され、鈍痛が体全体を襲った。

「大丈夫、コウ!? きゃあッ!」

夏苗姉さんが後から流れてきた濁流　　船腹から飛び出す大人たちに押され、俺のように甲板へ叩きつけられる。俺と夏苗姉さん突き飛ばして外へ飛び出した大人たちは、何かを喚きながら小さな漁船の上で右往左往していた。

「伏せるッ! 伏せるッ!」

悲鳴の合間に聞こえた義父の声。直後、甲板の上にいた数人の大人たちが、血しぶきをあげて次々と倒れていった。

響き渡る機関銃の銃声。撃たれた大人たちが、甲板に倒れ、ある者が海へ落ちる。

「ひっ!?!」

倒れていた俺の目の前に、ごろんと転がる死体に小さな悲鳴を漏らす。恐ろしい程に目をカツと見開いたまま、ぴくりとも動かない死体から、俺は目が離せなかった。

「コウ……!」

同じく倒れていた夏苗姉さんが、俺の視界を塞ぐように手で俺の両目を覆う。そして俺はそのまま体を引き寄せられた。

「起きちゃダメ。起きたら、撃たれる……!」

尚も聞こえる銃声。甲板に密着させたお腹から、暴れるようなエンジン音と船の激しい揺れが伝わる。

「お前たち、これを着なさいッ!」

義父の声。そして同時に光を取り戻す視界。その視界には、姿勢を低くし、服に他人の血痕を浮かばせた義父が二つの救命具を両手に抱えた姿があった。

少し大き目の救命具をただ着せられるままになる俺。その隣で、義父から救命具を受け取ったまま着る様子を見せない夏苗姉さんが叫ぶ。

「お母さんはッ!?」

「……………」

夏苗姉さんの言葉に、俺に救命具を着せる義父は苦虫を噛み潰したような表情のまま何も答えなかった。義父の無言の返答に、夏苗姉さんは絶望の色を表情に染めた。

「そんな……………」

「お前も早く着なさい。間に合わなくなるぞ!」

人形のように動かない俺に救命具を着せた義父は、今度は夏苗姉さんに救命具を着るように促す。しかし夏苗姉さんは泣きそうな顔でふるふると首を横に振った。

「お、おとうさんは……………」

「お父さんは後から行く! お前たちは早くここから逃げろッ!」

「逃げろって言われても…………どこに逃げれば良いのッ?!」

夏苗姉さんの言う通り、ここには逃げる場所なんてどこにもない。何故なら、周りは全て、海なのだから。

義父はいいやと泣いて拒む夏苗姉さんに、無理矢理救命具を着させた。そして救命具を着た俺たち姉弟を、義父が両腕に抱きかかえた。

船はいつの間にか停まっていた。視界の端に、黒煙が映った。

「エンジンをやられたか……………」

俺と夏苗姉さんを抱えた義父の声が聞こえた。

再び響き渡る銃声。視線を向けると、白波を立てて近付いてくる警備艇が見えた。その船上には、機関銃を構えた兵士たちの姿があった。

「嫌だ、嫌だよッ! お父さんやお母さんも一緒じゃなきゃ、嫌だッ!」

泣き叫ぶ夏苗姉さんを、俺は初めて見た。

そんな夏苗姉さんを、義父が宥めるように優しくに声をかけた。

「お父さんもお母さんも、お前たちのそばにずっといるさ。だから、早く行きなさい」

「だったら……一緒にいこお……?」

「約束する。おとうさんは、お前たちとずっと一緒にいてあげる」

ぐずる夏苗姉さんを、義父が優しい表情を浮かべたまま、そつと夏苗姉さんの頭を撫でていた。

「浩。お前が、お姉ちゃんを守るんだよ」

俺はその時、驚いたということさえ気付かなかったと思う。

ただ、義父の優しい表情だけが覚えていた。

いつも俺が、夏苗姉さんたちに守られてきた。いつかは俺が、守る側になるうと心に決めていた。

でも、俺はここで初めて義父に言われた。

「ただ　俺は、その約束を守れない。」

「何があっても、生き延びてくれ」

その言葉を最後に、義父は俺と夏苗姉さんを突き飛ばした。海へ放り出される中、俺は見てしまった。聞こえてきた銃声と共に、血しぶきをあげながら撃たれる義父の姿を

辛うじて救命具によって浮かぶ俺は、時々押し寄せる海水を飲まないように必死に波間を漂っていた。海中にある体はまるで宇宙に放り出されたような感覚だった。

視界の端には、さっきまで俺と夏苗姉さんが乗っていた小さな漁船が燃えている。そこに乗っていた他の大人たちの末路を、船から投げ出される前に俺はこの目で見ていた。

「コウ、そこにおいて……!　今、お姉ちゃん行くから……」

離れた海面から、同じく救命具を着た夏苗姉さんが、波が高い海面の中を必死に掻き分けるように泳いでくる。しかし波は容赦なく、俺たち姉弟を引き離そうとしていた。

「お姉ちゃん絶対にコウの所へ行くから……そこで待ってて……！」

夏苗姉さんは必死に俺に向かって声をかけてくれる。しかし、夏苗姉さんの姿は一向に俺のもとへ近付いてこなかった。

逆に、夏苗姉さんがどんどん俺から流されるように離れていく。

「夏苗……姉ちゃ……」

俺は引き離れていく夏苗姉さんに向かって、手を伸ばす。

遂に夏苗姉さんの声が聞こえづらくなっていく。そして視界の端に見える、燃える漁船。俺は最後に見た義父の撃たれる姿と言葉を思い出す。

約束した。俺が、夏苗姉さんを守ると

しかし、伸ばした手さえ夏苗姉さんに届かない。

夏苗姉さんの姿が、少しずつ波間の奥へ消えていく。

「夏苗姉ちゃん！ 夏苗姉ちゃん……！」

俺は必死に叫ぶように、夏苗姉さんと呼ぶ。

しかし海中に放り出された体は、いくらもがいても何も触れることはなかった。

まるで、夢の中にいるかのようだ。

現実ではないみたいな感覚。

そう、これは夢だ。

夢の中であるはずなのに

舌にまとわりつく海水の塩辛い味、体に纏わりつく不気味な感覚だけが、鮮明に感じられた

「ッ！」

八雲浩は、汗でシートに粘りつく嫌な感触と共に目を覚ました。

上半身を起こ上がらせた八雲の体は、汗で張り付いたシャツから鍛えられた強靱な肉体を誇張していた。軍人として鍛え抜かれた身

体は、昔の自分との離別を毅然として告げている。

まだ海水の塩辛い味が舌に纏わりついている口を潤すため、八雲は洗面台へと直行した。蛇口から流れ出る水をコップに満たし、その中身を口元に洗浄するように流し込んだ。

「また、あの夢か……」

今まで数えきれないほどに見てきた夢。あの時の記憶が、悪夢として蘇ってくることは今までも何度もあった。

少し濡れた唇を拳で拭いながら、八雲は机の上に佇んだ写真立てに視線を向けた。

そこには、かつての家族　　子供時代の自分と姉、両親との初めての家族写真が収められていた。

そこに映っている自分は、ひどく無愛想。あの人たちに招かれたばかりで、まだ心を開いていない時期だった。

そして自分の隣に写る姉が、ひどく優しい微笑みを浮かべている。

「……夏苗姉さん」

あの海で、離れ離れになった姉。姉に守られてばかりだった自分が、やっと姉を守ろうとした。だが、それを叶うことができなかった。

あの真つ暗で狭い船腹に、姉や両親と一緒に身を潜め、自由を夢見ていた。自分たち家族を含め、同じ夢を抱いていた他の大人たち。そしてそんな夢を打ち砕くように現れた、国境警備隊の警備艇。次々と撃ち殺される大人たち、燃える船、海の波間に揉みくちやにされる自分、全てが今でもはつきりと思い出せる。

義父の提案で、脱北を決意したあの夏。この国にはない自由と安住の地を求め、党を裏切った自分たちに待っていた結末は、ひどく陰惨なものだった。

あの船の上で義父と義母は死に、海の上で離れ離れになった夏苗姉さんの行方もわからず。

海面に浮かんでいた自分を、国境警備隊の兵士たちが救出し、一人だけ生き残ってしまった。



しかしその後待っていたのは、苦痛に満ちた尋問だった。脱北の罪を問われ、自分の知っている情報を全て吐き出すまで許されなかった尋問の日々。死ぬより辛い精神的苦痛。自我を失う程の肉体的苦痛。人間の知る『痛み』を総じて味わされたような地獄の一週間。

あの時はまだ子供で、脱北の主犯だった義父が死んでいたことで、強制収容所行きは免れた。

全てを失った八雲は、そのまま使い捨てのように軍へ入れられた。お前のような裏切り者なんていつでも切り捨てられる、と言わんばかりの酷な訓練と任務の数々を乗り越えている内に、八雲は年に似合わないキャリアを昇りつめていた。

しかし、いくらキャリアを得ても、自分がいつでも切り捨てられても構わない任務を与えられていることは変わらない。

それは、今回も同じだった。

「この国に生きて帰っても、どうせ何も変わらない……」

机の上に置かれた写真立てのそばには、一通の辞令があった。

ベッドから立ち上がった八雲は、その辞令の紙面に視線を落とすた。そこにひどく簡潔に書いてある内容は、今までと特に変わらな  
い、正に簡潔明瞭で、ひどく酷なものだった

## 02 塩辛い過去（後書き）

解説

脱北

北日本からの亡命、脱出行為を指す。北日本の政治体制、生活環境に耐えられず南日本へ脱出する人々を『脱北者』と呼ばれる。北日本政府はこれを厳しく取り締まっている。

国境警備隊

41度線付近の警備を管轄する人民国防軍の部隊。主に脱北者の取締を執り行う。

海の上、救命具で浮く恐怖。波が高いと塩辛い味を経験する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6322z/>

---

南北の海峡 -The Split Fate-

2011年12月23日23時53分発行